
バンパイア

藍原暝風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バンパイア

【Nコード】
N0612F

【作者名】
藍原瞑風

【あらすじ】
主人公の周りで次々と起こる事件、主人公の前に不思議な少年が

プロローグ

ある雨の降る夜の事だった彼女は薄暗い道を一人で歩いていた。すると、コツコツと足音が聞こえた。

振り向いても誰もいない。そして、彼女はまた歩きだす。また、コツコツと足音が、彼女に近づいて来る。彼女は走り出した。しかし、遅かった。

彼女のまわりが、真っ暗になった。彼女の動きが止まった。暗闇に彼女は包まれていった。彼女は目をあけた。めのまえにいたのは西洋人だった。綺麗な顔をした男。次の瞬間、彼女のくびすじに痛みがはしった。彼は彼女のくびすじかぶりつき、彼女の血を吸った。これが、2分くらい続いた。そして、彼女は、倒れこんだ。

1 青空

朝の6時30分、僕は、朝の日差しで目を覚ました。僕は、窓を開け、雲一つない青空を見上げる。

「綺麗な青空だなあ、しかし、なんか嫌な予感がする」僕は、制服に着替え、下におりた。

「おはよう、義理父さん、義理母さん、美羽。」そう、僕には、親がいない僕が5才の頃、両親が自殺した。僕は、一年ぐらい、施設に預けられていた。

僕は、いつも独りぼっちだった。そんな、僕を、拾ってくれたのが、明日川家の人達だった。

「真廣友愛？いいなまえね両親がいないならウチに来る？よし、今日から明日川友愛よ、いいわね」あの時の事は決して忘れない。

「おはよう、兄ちゃん」

元気いっぱい義理妹、六歳の美羽、ちなみに、僕は12歳。

「行ってきます」「行ってらっしゃい、友愛」

僕は、学校に向かってあるきだした。教室のドアを開ける。

ガラッ。

「おはよう、友愛、逢いたかった」

いきなり、少女が、僕に抱き着いてきた。

「お・・・おはよう、愛夢」

彼女は、僕の、友達の上原愛夢。

「おはよう、いい天気だね」

二人に近づいてきた、少女彼女も、クラスメイトの奄美婁衣。

「そうだね。」

「るーちゃん、僕から、友愛とつちゃダメだよ」彼女は、ニコツと微笑んだ。

「あつ、友愛君、今日のニュース見た？」

婁衣が聞いてきた。

「ううん、見てないけど」

「あのね、東京の方で、殺人事件らしいのがあったんだって」
殺人事件？

「本当、どんなの？」

「なんかね、殺されたのは朝倉麻里子っていう女性。殺され方が不思議なの、女性の身体には血が一滴もないの、くびすじに小さな二つの穴があるだけなの。」一滴も血がない。

首筋に二つの穴。

確かに不思議だ。

そういえば、なんかの本でみたことあるぞ、日本各地で連続殺人事件が起こって被害者には、血が一滴もなくて、あるのは首筋に二つの穴、この本だと、犯人は吸血鬼だけど、この世に吸血鬼なんているわけない。また、この事件はおきるのか。2

夜空

僕は、その日の夜、事件の事を思いだし、考えていた。あの事件は、また、おきるのか、こんなこと、誰も、予想出来ない事だろう。僕は、そんな事を考えながら眠りについた。

朝、僕は、目を覚ました。カーテンをあけると、空は曇りでどよ～んとしていた。

「嫌な天気だなあ、もしかして、また、事件が起きたんじゃない」

そう思い、僕は、制服に着替えて、下におりた。

ニュースをみると、

「また、事件発生、場所は、群馬県、」

また、起きた、東京、群馬次はどこだ。

僕は、殺気のようなものを感じた。もしかしたら、ターゲットは僕なのではないか。頭が不安でいっぱいになった。

「どうしたの？友愛、顔色わるいわよ」

「へ・・・平気だよ。心配しないで」

僕は、無理に微笑んで見せた。学校に行くと、婁衣が、声をかけてきた。

「友愛君、ニュース見た？」

「うん、みたよ。また、起きたんだね、あの事件。」婁衣は、うすら笑みをうかべ、

「もしかしたら、友愛君を狙ってるかもね。」

「えっ」

彼女は微笑みながら去って行った。

僕は、彼女を見つめていた。「友愛ー、逢いたかったぞー」

「愛夢、彼女はなんなんだろう」

「？」

僕は、彼女が、何か知っているのではないか、そう思った。

夜、僕は、彼女の事ばかり考えていた。

彼女が、バンパイア？

まさか、・・・でも、そうだとしたら。

彼女は、何が目的なのか。それは、わからない。 3

僕は、思いつめながら、学校に行った。

「おはよう、友愛君、なんかね、今日、転校生が来るらしいよ」婁衣が言った。

「へえ。」

僕の学校に来た人は西洋人のような少年。

「はじめまして、ディエル・マカニーです。よろしく」

不審な笑みをうかべる少年彼は何か知っている。

僕は、そう思った。

彼の席は、婁衣の隣、僕の前だ。

嫌な予感がする。

彼は婁衣とやけに親しそうに話している。

「婁衣、学校案内してくれない？」

「いいよ、」

彼女はそう言っ、僕の方を見て、

「友愛君も、一緒に行かない？」僕は、ドキツとした。

「いや、いいよ、二人で行ってきなよ」

彼女は、残念そうな顔をして、去って行った。

僕は、少しほつとした。

何か起きる、僕は、そう思った。何か起きるんだ。

夜、僕は、あの転校生の事を調べていた。

もちろん、彼女の事も。

「ディエル・マカニー、出身は、ルーマニア、父ディル、母エマニ
ー、」

次の一文に、衝撃的な事が書いてあった。

「父はblood一族の一人・・・吸血鬼？、母親はルーマニア人」

彼の、血液には、吸血鬼の血も流れているのか。

次の日、学校に行くと、僕の机のところに、ディエルがいた。

「お前の父親の名は、ディル、お前の父親は、吸血鬼だろ」

彼は、うつすら笑みをうかべ、

「よく、調べているんだね」

彼は笑いながら、去って行った。やはり、あいつが、吸血鬼彼は、

何が、目的なのか。 4

月夜

その夜、空には、まーるい満月があった。この時間、また、事件が、起きているのではないかと、僕は、思った。

次は、どこなのだろう。

そんな事を考えながら、眠った。

朝、僕は、目を覚まし、カーテンを開けた。

綺麗な青空だった。

下におり、ニュースを見た。

「また、あの事件、場所は静岡県　×市　町で女性の死体を発見、

」

何故だ、ここから、あそこまでは、距離がある。

なのに、彼は、あそこまで・・・まてよ、もしかしたら、他にも、吸血鬼が、いるのか。僕は、そう思った。

どのくらいいるのだろうか僕は、学校に行った。

「おはよう、友愛君」

ディエルが、話しかけてきた。

「もうすぐ、もうすぐだよ友愛君、君は、私が守る」

「何言ってるんだ。」

「吸血鬼が来る、私と逃げるんだ、吸血鬼は、君を狙ってる」僕と、彼は、走って、屋上に行った。

「上に婁衣がいる。」

ガチャ。

ドアを開けると、婁衣が、倒れていた。

「逃がさないよ、友愛君」そこには、みたことがない男が立っていた。

「友愛君をよこせ、ディエル」

「嫌だ、彼は、食い物ではない」

「うるさい、彼の血を吸えば、不死身となるのだぞ」何を言ってるんだ？

「親父、あんたとは、一生親子にはなれそうにない」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0612f/>

バンパイア

2010年10月27日02時05分発行